

文章力

2024.1.9

「チャットGPT」を取り上げる。最近よくこの言葉を聞く。いったいどこの会社が開発したのかと思ったら、アメリカ、マイクロソフト系企業のオープンAI社だった。対話型の人工知能(AI)であるチャットGPTは、2022年11月にWeb上で公開された。質問すると、実に自然な文章で回答してくれる。チャットGPTの文章作成能力を使って、様々な業務の省力化が期待されている。

チャットGPTを使えば、本を読まなくても読書感想文を書けてしまう。これでは、子どもたちの文章力が育たない。このような危機感が繰り返し報じられている。果たして、そうなのかという意見もある。AIは便利なものだが、所詮道具にすぎない。電卓の普及で私たちが計算能力を失ったのかどうかを考えてみれば結論は明らかだろうと。

チャットGPTは、単語がどのような順番で配列されるかの確率を求め、それをパターン化した言語モデルと呼ばれる仕組みを使って文章を作成している。事前に何億通りもの文章を学習し、その中から質問の答えとして最適なパターンを選んで単語を組み合わせるため、自然な文章になる。

学校に勤務していると、原稿を作成し、何度も書き直すということはまずない。直しても一度か二度、それも大幅な修正ではない。ところが、学校以外となると、原稿を書いても上席の朱書きにより真っ赤になって返ってくる。これが何度も繰り返される。ようやくOKが出たときには、まるで別の文章になっている。担当者からすると、修行のようなものである。この苦行を乗り越えることで文章力がついていくはずだと、自分を納得させ、割り切る。

チャットGPTの言語モデルは、とにかく書く、何度も書き直すという修行を自動化したにすぎないのかもしれない。何千、何万の文章を書くうちに、頭の中に文章のひな型、テンプレートが蓄積されていく。最適なテンプレートを選び、そこに単語をはめ込むことで文章が出来上がる。当然、テンプレートが多ければ多いほど、多様な文章表現ができるようになる。このテンプレートの数が文章力であり、書く経験を積むことが文章の作成能力を身に付ける唯一の方法なのではなかろうか。

ある調査によると、小学生のおよそ6割が、作文に苦手意識をもっている。この割合は、大人も変わらないだろう。自分で文章を作成した経験値が、学校教育や社会生活の中で、ほとんど増えていない。書かないから、書けるようにはならない。

チャットGPTに文章力を奪われることを気にする前に、学校教育での文章力育成の在り方を見直す必要がある。チャットGPTの出現を、文章指導を振り返り、見直す契機としなければならない。